

小さな島から大きな物語を

大城貞俊

今回の最終選考会に届いた作品は八編。共通した特質を二点ほど上げると、一点は小説は虚構であるがゆえに虚構の力について自覚的な作品が多かったこと、二点目は島を拠点にしてグローバルな世界へ広がる大きな物語の創造に工夫を凝らしていることだった。

第一席の「島の塔頭（タッチュー）と電照菊」（国梓としひで）は小さな島から国境を飛び越えた作品を生み出した。ミャンマーから沖縄の百渡島にやって来た農業技能実習生のボク（タント）の語りで作品は展開するが、受け入れ先のオーナーの祖父清助おじいはボクとの交流の中で、封じ込めていたミャンマーでの戦争体験を思い出す。ボクの祖父を死に追いやった記憶だ。清助おじいは死を前にして、手紙で自らの行為を告白して断罪する。ボクも誠実な告白を許し、未来に向かって生きていく。重いテーマを架空のものにせず登場人物の日常生活の中で描く。ウクライナやパレスチナで戦争があり人命が失われている今日の時代に必要な人間の矜持を示した作品とも言えよう。特に島のタッチューにミャンマーの仏塔を重ね、電照菊に死者の霊を慰める伝統行事（ダディンジュ）を重ねてミャンマーと沖縄をつなぎ、過去と現在をつなぐ作者の工夫は効果的で作品へ深さと広がりをもたらした。今日の時代への希望をも提示した作品であった。

第二席の「アサギマダラ」（向井田周明）も島というテーマに沿ったユニークな作品だ。かつてアサギマダラが目指した島を、今日では人類が目指す島としての火星を設定したところに新鮮な発想がある。島という概念を火星にまで広げ、余計なもの思い切って削ぎ落とし作品の展開も見事で、地球環境の悪化を背景に描いて現代の課題をも彷彿させた。

佳作の「春の嵐」（時津逸）は、十四歳のときに出会った男女が指一本触れることなく五十年余の歳月を経てもなお互いを思い続けるという奇跡の物語だ。文章も素晴らしく目前に風景や人物の映像が浮かんでくる。ロマンを前面に押し出す作品世界に一種の心地よさを覚えた。自我を主張し他人をあしざまに批難する時代の風潮に警鐘を鳴らし人間への信頼を取り戻す、これも文学の力の一つだと思われた。

他の最終候補作は「島の記憶」「八月の白い月」「通り雨のあとに」「たそがれ」「しまうまのしま」である。九十八編の応募作から選り抜かれた作品であるだけに作者の想像力と創造力を遺憾なく発揮した作品が多く好感を持てた。さらに一歩の精進を期待したい。